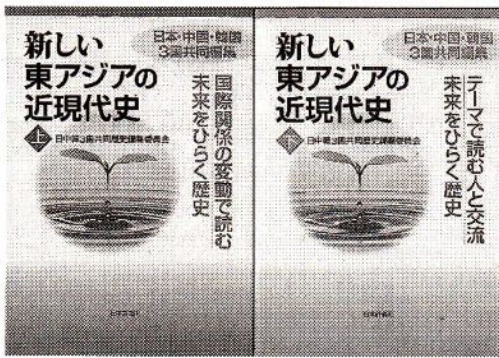


日中韓で歴史書づくり

朝日新聞
12(H24)
11.14

かつてアジアを侵略した日本と、大きな苦しみを味わった中国、韓国が、歴史認識を共有することは可能なのか。3国の歴史学者や教師らのグループがこの難しい課題に挑み、東アジア近現代の歴史書を共同で編集した。6年を費やして記述を統一。尖閣諸島や竹島の領有問題をめぐり歴史に関心が集まる中で今秋、刊行された。

グループは「日中韓3国共同歴史編集委員会」。大日方純夫・早稲田大教授や笠原十九司・都留文科大名誉教授ら30人以上が参加した。2006年に共同編集に合意。国別の分担を決め、原稿



「新しい東アジアの近現代史」

学者ら40人超、6年かけ

を互いに批評して修正する作業を続けた。国際会議を14回開き、メールも頻繁にやりとりした。日本では『新しい東アジアの近現代史』上下2巻(各2625円)として日本評論社から出版された。

大日方教授は日清戦争の時代を執筆。日本がいつから朝鮮や中国への勢力拡張を目指したのが大問題で、日本では日清戦争以降と考えられているが、中国では「明治維新当初から一貫していた」とみられている。この違いは本文とは別のコラムで説明した。笠原名誉教授は第2次大戦後を担当。1989年の天安門事件について「民主化要求により対立が生ずるなかで、

■上巻各章のタイトルと担当国

1章	「西洋による衝撃と東アジア伝統秩序の動揺」=韓国
2章	「日清戦争と東アジア伝統秩序の解体」=日本
3章	「日露戦争と列強の覇権争奪」=中国
4章	「第1次世界大戦とワシントン体制」=韓国
5章	「日本の侵略戦争と東アジア」=中国
6章	「戦後世界冷戦体制の形成と東アジアへの影響」=韓国
7章	「東アジアにおける冷戦体制の変容」=日本
8章	「冷戦体制崩壊後の東アジア」=日本

争いが激化した。……このとき、天安門事件が発生した」と記した。

初稿では、民主化運動に対して政治指導者が武力制圧を選んだと説明。天安門前の街路が「学生や市民の血で汚れた」と記していた。中国側委

討論して記述統一 認識の違いも明記

員が記述自体の削除を求めてきたのに対し、「世界でも知られた事件であり記述しないわけにはいかない」と反論。激しい討論の末、中国側が受け入れられる「ぎりぎりの記述」に落ち着いたという。

満州事変から太平洋戦争までの時期は中国が執筆を担った。広島・長崎への原爆投下に対する認識の違いはコラム

で言及。中韓では戦争の早期終結のためには避けられなかったと考える傾向が強いと指摘しつつ、「日本人にとって

は戦争の責任に対する深い反省が、日本以外の世界にとっ

ては原爆被害の残酷さを直視して平和の絶対的な価値を大切に

する姿勢が、ともに認められている」と結んだ。

下巻第8章は戦争に関する「体験と記憶」がテーマ。この章の最終合意に至る前の5

月、実務上の事情から韓国版が出たため、日本版では、韓

国の担当した本文に、日本と中国(今月出版予定)が要求した修正内容を付記した。

例えば本文には「日本の侵略と支配にかかわる中国や韓

国の記念館」が「真の和解や共存意識よりは集団的な対決意識をより強烈に助長する」

「歴史認識の相対化を妨害したりもする」とある。これに対し中国側は「一面的だ」

「(中国と韓国)」「相違点」を重視する必要がある」と批判した。

編纂委のメンバーは05年、中高生向け共通教材として『未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史』(高文研)を編集した。だがこの時は3国の執筆者が原稿を持ち寄り、並べるにとどまった。敵対した過去をもつ国の間で歴史書を共同編集したのはドイツとフランス、日本と韓国などに例があるが、3国間で共同編集した例は見あたらな

いという。

大日方教授は「日本からしか見えなかった事柄が向こうからも見えるようになり、研究者として刺激になった。相互理解のためには、歴史を国境で切るのではなく、照らし

合い、『同じ』と『違い』を分かりあうことが大切だ」と話している。

(吉沢龍彦)